

叙事詩と譜本

藤井知昭

叙事詩の詠唱と記録

天地創生や英雄など古代以来、語り・歌いつづけられてきた叙事詩は数多い。

「人類の口承」の傑作としてユネスコによって評価されるようになった近年、無文字社会の伝承はじめ、おびただしい数の語り、歌いつづけられてきた叙事詩群が新たな注目を集めている。

フィリピン・マラナオ族の「ダランゲン叙事詩」はじめパレスチナの「ヒカイエ」など文字化されていない叙事詩とともに文字化された記録も残るヤクートの英雄叙事詩「オロンホ」やキルギスの叙事詩「アキン」など、従来あまり注目されなかった歌い・語りつづけられてきた叙事詩が浮上してきている。

これらの中で文字化された記録に、旋律や音程などを含めた音表現の記号が付された「譜本」ともいうべき資料も少なくない。

もつとも古いとされ三五〇〇年前までさかのぼると考えられる「ヴェエダ」の詠歌とされる「リグ・ヴェエダ」やとりわけ「サーマ・ヴェエダ」は興味深い。これを口頭伝承してきた数多くの流派の中で、現在十三派が主たる活動をつづけているが、この中でもそれぞれの時代に文字化された資料に、音表現の符号が付されたものも数少なくない。いわば「譜本」ともいえる最古のものを紀元前一世紀のものとはほぼ認定されていると考えられる。この資料を軸に、歴史的時代の想定のもとに年代的比較研究が行われ、現在の口頭伝承との変容を考える試みも行われている。

「ヴェエダ」以外にも「ラーマ・ヤナ」や「マハーバラタ」などインドを中心とした伝承に限らず「ギルガメッシュ」(イラク)や「シヤナーメ」(イラン)なども、譜本ともいえる資料は少なくない。

近年では、チベット仏教説話の一つ「ケサル」の口頭伝承を、チベット、ブータン、モンゴルでの現在の伝承との比較が進展しつつある。

ロンスヴォー学会

北スペインのロンスヴォーを拠点とするこの学会は、世界各地の詠唱される叙情詩の総合的資料集や比較研究を展開し、かつて「平曲」にも注目し、井野川検校がこの学会に招かれ演奏し、大きな話題を集めたのは一九七八年と記憶している。

因みにこの学会は、八世紀フランスのカソリック軍とイスラム教に支配されていたスペインのサラセン軍と激戦し、死亡したロラン將軍を讃える「ロランの歌」の伝承地に由来した学会である。

このロンスヴォーの地を通る南フランスから北スペインの道は、中世ヨーロッパの聖地から聖地を旅する巡礼の道として知られるとともに、吟遊詩人の道でもあった。

このロンズヴォー近くの教会から、十一、二世紀と推定されるロランの説話に、ネウマの音記号が記されている文献が発見された。これを契機に、中世日本における平家物語を語り歩いた琵琶法師が注目され、その比較研究が進められたが、この学会を離れて十年余も経た現在、その後の進展の情報は不明でもある。

「平家正節」演奏表現

平家物語を琵琶の伴奏で語る文化の中で、その語る音表現に関する記号が付された譜本の中で、比較的時代を下った安永五年（一七七六年）萩野検校によってつくられた「平家正節」がもっとも広範で、名古屋における平曲の伝承も「平家正節」が基本になっている。

しかし、これら譜本と実際の演奏表現はさまざまな変容が見られる。

名古屋で平曲を伝承されてきた井野川、土居崎、三品の三検校はいずれも他界されたが、昭和二十六年（一九五二）から、伝承されてきた八曲の採譜を藤井制心が始め、十六年ほどかけた集成が「採譜本・平曲」（昭和四十一年）として刊行された。

この採譜は毎月一、二回、多い時は毎週のように三検校が藤井宅に参集されて吟じつづけられてきた。

この作業のかんりの回数を手伝った中で印象は、「平家正節」を軸とした前田流の方々だが、かなり伝承は差異があることを実感させられた。三検校はそれぞれの語り口を主張され、激論され統一した表現にするための難しさを実感している。

名古屋でも井野川検校は木村検校、土居崎、三品検校は佐藤検校から学ばれたが、その系統による伝承の違いとも考えられたが、土居崎、三品検校でも差異があり、又、同じ前田流でも仙台の館山甲午氏の伝承とはかなりの差異があった。

また井野川検校の自宅に通い三年ほど教えていただき、その度に録音を認めていただいたが、同じ「宇治川」でも毎回少なからず変容する実態も学び知った。

この録音資料をコンピュータ音響システム分析での分析を試み、変化しない要素と変化する要素を抽出、この変化しない要素と譜本の比較も進めたことがある。

シニヤフスキーなど叙情詩伝承と盲目性とのかわりを探る研究もあり、この側面もまた譜本と表現を探る一つの視点でもある。

(国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センター所長)